

人工着色

季節感が薄れ、夜の闇を失い、まばゆいばかりの都会の生活、夏の暑さも冬の寒さも、忘れ
たような感覚、人間の英知なのか、肉体的にはすっかりと楽になった日本人の生き様。まさに
人工着色したような日本です。食べ物には本物が手に入りにくくなり、何が口に入っているのか
もわかりません。旬の食べ物がなくなり一年中金さえ出せば、であります。昔小泉八雲「ラフ
カジオ・ハーン」が感動し「春は桜の花の色に、夏は生まれて忽ち死ぬる蝉のいのちに、秋は
うつろふ紅葉の色に、冬は降り積む雪のこの世ならぬ美しさに」と詠んだ日本人の心の風景は
すっかり失われていっています。元々日本人は鋭敏な感受性、そして季節感覚を持っていると言
われましたが、今ではそんな言葉には、お恥ずかしい限りです。高速道路、飛行機、新幹線、
スピードと効率のみを追い求める社会、忙しく、いや忙しそうに立ち回らなければ立ちゆかな
い仕事、人間中心にあらゆるものを、変えてきた私たち、ここにも人工ばかりが目につきま
す。仕事、働くことは「ハタをらくにする」と昔はいわれました。それは、働く人の誇りで
もあつたはずです。商人は、良い商品を売ることに誇りを持ち、農民、漁民は良い作物、良
い海産物を、作ったり採ったりすることが誇りであり喜びで会つたはずはです。お金儲けはその
結果としてついてきたものであつて、良質なものを作ることが第一義だつたはずはです。今は
やな言葉「勝ち組、負け組」、グローバル化の波に飲み込まれ誰もが必死になつて勝ち組にな
うとしています。でも勝ち組が出来ればその何倍もの負け組も出てくるのが世の常です。金を儲
けたのが勝ち組と囃したてるのはもう止めませんか。お金、モノ、これらに振り回され続け、手
に入れたものの代償として失つたものの大きさを思います。失つたものを取り戻すには相当の
エネルギーを要します。それは進むことではなく、立ち止まることを意味するからです。お金
やモノは使えば減りますし、傷んで来ます。目に見えたり、触ることの出来るモノはすべてそ
うでありましょう。しかしそれとは別に使えば増え、しかも価値がどんどん増す世界がありま
す。しかも使えば使うほど磨きがかかり値打ちが増すのです。とは申しても「何でも鑑定団」
の骨董品ではありません。例えば「親切」などはどうでしょう。「心の優しさ」などはどうで
しょうか。私たちは親切とか優しさを感じることはありますが、その親切や優しさを品物のよ
うに触ったり出来ないですし、目に見えたりすることはありません。学ぶということもそうで
す。そうしてこれら心で感じる世界の原則は、「使えば増え」「使えば磨かれますます美しくな
る」ということでしょう。親切とか、学びとか、優しさは、使えば減りますか？ 眞実はこんな
ところにあるのではないのでしょうか。仏教の価値観もこれと同じことが言えると思います。何
でも使えば損と、貯め込み、損得勘定ばかりが巧みになり、『良く生きる』事をすっかりと忘れ
ているようです。たまにはそんな世界から離れて、使えば増える世界に行きませんか。人工着色
した世界はどこまで行ってもほんとうではありません。どこかでごまかし、他人を、そして自分
を騙しながら生きていくようなものです。仏教を聞くのはまさにこの本当の世界を聞くのです。
こんなささやかな喜び、これが人間の至上の喜びと一つことを仏教は示しています。

平成十七年九月

北広島市大曲緑ヶ丘二丁目十六ー一 三七六一二二五五

浄土真宗本願寺派 興徳寺